

ジョン・ロックの寛容論と宗教観

増田 美寿々

序章 問題提起

宗教的寛容が大きな社会的問題として登場するようになったのは、宗教改革期以降のことである。十六世紀のジュネーヴで起きたセルヴェ事件⁽¹⁾に端を発した、セバスタン・カステリヨ⁽²⁾ (Sebastianus Castellio: 一五一五—一五六三年)の権力に抗う良心のたたかいは、彼を宗教的寛容の先駆者と呼ぶにふさわしいものだった。

その宗教的寛容を概念化させたのが、ジョン・ロック (John Locke: 一六三二—一七〇四年)である。ロックは亡命中の一六八六年に、『寛容についての書簡』(A Letter concerning Toleration) (以下、『書簡』)を執筆する。このロックによる寛容論は後の宗教的寛容論に大きな影響を与えたといわれている。

しかし、ロックは寛容論を唱える一方で、寛容から除外されるべき対象を挙げている。これらは、ロックの限界ないし時代の制約などという言葉で論評される⁽³⁾。『書簡』に

おけるロックの寛容思想や宗教観がいかなるもので、『書簡』にどういった意図が込められていたのであろうか。本論文は、当時の社会情勢やロックの寛容思想が形成された背景を考察することで、ロックの寛容思想や宗教的信条を明らかにしていくことを目的とする。

先行研究としては、寛容論を哲学的著作として捉えた、Jeremy WaldronやSusan Mendus⁽⁴⁾によるものが存在する。しかし、これらの研究は『書簡』が書かれた歴史的背景を十分に描いていない⁽⁵⁾。また、Richard Ashcraftの *Revolutionary Politics and Locke's TWO TREATIES OF GOVERNMENT* や香内三郎の『ジョン・ロックにおける「寛容」論の近代的転回』では、『書簡』には、ロックが反カトリック偏見と恐怖を示そうとする意図があったとしている。他方で、大澤麦のように『書簡』はロックがイスラム教徒やユダヤ教徒同様にカトリック教徒をも寛容の対象にしており、国教会の統一の維持を擁護するという立場を示すものという見方もある。

ロックの宗教的立場については、研究者によって異なる見解がある。Mendus はロックは非国教徒で、心底からのピューリタニズムへの宗教的な関与をしていたとしている。反対に、Richard Ithamar Aaron (一九〇一—一九八七年)、久保信本や大澤麦らは、ロックは国教会の立場であつたという見解をしている。しかし、加藤節は、「ロックの宗教的帰属を断定することは、おそらく不可能に近い⁽⁶⁾」と論じる。

本論文では、社会情勢や歴史的背景を踏まえた上で、ロックの『書簡』における寛容思想や宗教観を明らかにしていく。

史料については、一六八九年十二月にロンドンで匿名クラフトとして出版されたロックの『寛容についての書簡』(Epistola de Tolerantia; A Letter on Toleration) を用いる。これは一六八九年五月にハウダにて出版されたロックのラテン語原典を、ロックの友人ウィリアム・ポプル (William Popple、一六三八—一七〇八年) が英訳したものである。原典とポプル版には差異があるという議論がある。こうした議論を踏まえつつも、「ラテン語原文とポプル訳との差異は必ずしもそれほど大きくはない⁽⁷⁾」や、「両版の思想的相違を安易に断定するのは拙速である⁽⁸⁾」という見解から、史料としては妥当である。

第一章 ジョン・ロックの時代と人生

第一節 生い立ち

1 ロックの血筋

ジョン・ロックは一六三二年八月二十九日に、イングランド南西部のサマセット州のリントンで誕生した。父ジョン・ロック (同名) は法律家で、ジェントリ、母アン・キーンは製靴業者の娘で、両親共に熱心なピューリタンだった。ロックの父親は内乱時に、議会軍の騎兵隊長として活躍している。ロックの家系は 4

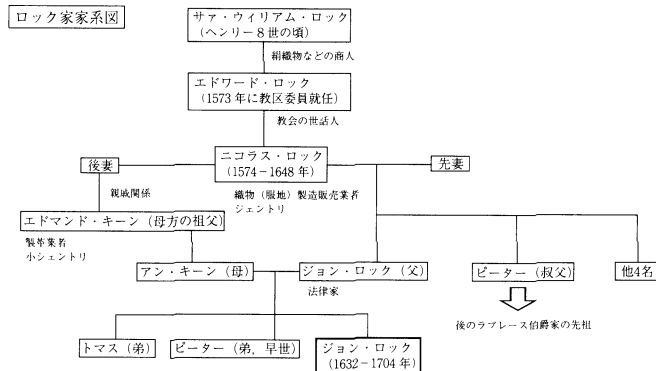


図 1：ロック家系図

参考資料を元に筆者作成。

代前まで溯ることができる。

ロックの先祖には、商人・製造業者・ジェントリが多いことが分かる。当時の社会状況を踏まえると、ロックの生まれ育った環境は、イングランドの新しい時代や考え方を典型的に示した家系・家庭であったと指摘できる。そうした環境の中、ロックは厳格なピューリタンの教育を受けて育った。後述する『政府二論』における絶対王政や専制政治に対するロックの反抗的な姿勢は、イングランドの社会状況におけるロック家の立場を示しており、ロックが反国王的态度を取ったことも当然なことだと考えられる。

第二節 思想変遷の概観

『人間悟性論』と『統治二論』には『書簡』の土台となる理論が展開されている。また、同時期に出版されているため、『書簡』の中の思想と顕著な違いがないと考えられ、ロックの寛容思想の背景として分析が必要といえる。

1 『人間悟性論』(An Essay Concerning Human Understanding, 一六九〇年十二月出版)

A 第一巻 生得思念について

ロックは生得概念を否定している。その理由として、「かりにもし道德原理が生得で、人々の心に捺印されていたとしたら、どうして人々が自信をもって平然とそうした道德

原理にそむくか、私にはわからない」と述べている。⁽¹⁰⁾

さて、ロックは神の観念も生得ではないという。理由として、「神」や「宗教」という観念を持たない人がいること、さらには、無神論者がいることをあげる。そして、同じ神を崇める同士の争いに対して皮肉を交えて、「私たちは、同じ国の中で一つの同じ名まえのもとに人々が神の非常に違う、いや、しばしばあい反し撞着する観念・相観を持つものを見るが、そうしたとき、人々が神について持つ観念は、神ご自身のみ手で人々の心に彫りつけられたご自身の刻印であり、印であると考えられるか」と主張する。もし、神の観念が生得であるならば、同じキリスト教の名の下に血で血を争う戦いなど起きないはずだということが読み取れる。

B 第二巻 観念について

ロックは我々の心を「タブラ・ラサ」(tabula rasa 白紙の意味)に例えた。この心が観念を得るためには「経験」が必要である。この巻でロックは哲学や宗教の諸派の融和しない対立が確立される理由について、観念が「正しくない不自然な連結」⁽¹¹⁾(2-33-18)をするからだと言っている。そして、ロックは「観念のこの連結が樹立されるとき、そして続くかぎり、私たちを助けて、その結果から救うことは理知の力能にはない。なぜなら諸派の追隨者の

だれもが自分自身を故意に欺いて、平明な理知の提供する真理を知りつつ拒否するとは想像できないからである」(2-33-18)と論ずる。『書簡』で信仰者が正しいと思う信仰がその人にとつての真の信仰であるのではないかという問題同様、不可知論が展開されている。

C 第三卷 言葉について

第三卷では、人間の思想や、目に見えない観念を他人に伝えるために必要な外的可観的記号(「言葉」)について論じられている。

D 第四卷 真知と臆見について

第四卷では、数学や自然科学的観点から真知や、道徳的観念の真実性について書かれていることが特徴として挙げられる。この巻で重要なのは、「理知」と「神」の関係性についてであると考えられる。

i 理知と神

第一巻で生得観念がないことをはっきりと否定し、第二巻で人間は「経験」によって観念を得ると論じたロックが、人間を超越する神の存在を証明できるのかという矛盾に対し、理知は神によって人間に与えられ、神は理知を通して、その存在や真理を伝える(4-10-1)⁽¹⁵⁾という主張をしている。理知を人間に与えたのは神ではあるが、結局、理知の判断を通さないと人間は神の存在の正しさや真理を知る

ことができない。よって、理知のほうが優位な位置にあるという主張ととらえることができる。人間の理知の重要性を強調している点から、ロックが理神論であるとされる所以がある。しかし、加藤節はこうしたロックの思想に対して、「理神論」と強い親和性をもっている」という表現を用い、イギリスの哲学者で理神論運動の中心人物であったジョン・トールランド(John Toland: 一六七〇-一七二二年)との親和性を認めつつも「一線を画さなければならぬ」と論じている⁽¹⁶⁾。筆者もロックの思想を理神論と距離を置くべきだと考えている。その理由はロックの理知と啓示のとらえ方にある。

ii 理知と啓示

真知を判断するために必要なものの一つとしてロックが挙げたのが蓋然性で、同意は蓋然性によって築かれる。さて、同意の元となる命題としてロックは、以下の二つを挙げている。

①事実に関する命題(4-16-5)・・・観察され、人間が論拠だてるのが可能。

②私たちの感覚を超えている命題(4-16-9、12)・・・いろいろな論拠だてが普通の経験と矛盾し、歴史と承認の報告が自然の通常経過と衝突し、あるいは相互に衝突する。多種多様な同意をもって人々が臆見をいだくもの。

②に関して、ロックが想定する事実が把握できない事態とは、「奇蹟」(4-10-1)⁽¹⁷⁾である。例えば、聖霊による処女マリアの受胎告知、キリストによる病人の治癒や死者の蘇生、キリスト自身の復活などの「奇蹟」は事実としてわれわれは観察することはできない。しかし、「奇蹟」は、われわれの普通の経験と矛盾しても、「奇蹟」という事実に与えられる正当な論拠だてへの同意が減じないというのだ。

ロックによると、「奇蹟」的事象は、人間が論拠だてるのが不可能であっても、神ご自身が論拠だてられたものである。そして、それは「啓示」であり、「啓示」への同意が「信仰」である(4-16-13、14)⁽¹⁸⁾。

ここでロックは、神、奇跡などの存在を認めたが、あくまでもそれが真であるかどうかは、「理知」の判断によるもので、「啓示」も同様なのである。「理知こそ本来の裁判官で、啓示は理知に和合してその命令を裏書きしようとも、こうした場合に理知の宣告をむこうにはできない」(4-18-6)⁽¹⁹⁾という言葉に理知に対するロックの考えが如実に表れている。引き続き、理性の優位性を示したロックではあるが、「奇蹟」や「啓示」の超理知的性格を認めることで、「信仰」と「理知」の両立を図ろうとした。

2 『政府二論』(Two Treatises of Government, 一六九〇年

十月出版)

『政府二論』は第一部と第二部に分かれており、第一部では、王権神授説論者であるロバート・フィルマー(Robert Filmer: 一五八八―一六五三年)による、『パトリアーカ』(Patriarcha: 一六三五―一六四二年頃に書かれたといわれる。一六八〇年出版)を批判している⁽²⁰⁾。第二部では、人間が政府を作る目的が、生命、自由、財産の保護するためにあり、その下にある政治社会の設立方法を自然法的社会契約論から訴えている。

A 第一部

『パトリアーカ』の中で、「人間は生まれながら親に隷属しており、自由ではないことから、人間は生まれつき自由ではないとして、人間は全人類の最初の父であるアダム、その直系の子孫である各国臣民の父である国王へ絶対的に服従すべきである」という主旨の考えが展開されている⁽²¹⁾。こうした王権神授説では、君主が持つ神からの系譜が重要であり、フィルマーもそれを聖書によって証明しようとした。これに対し、ロックは、フィルマーが聖書の言葉を用いたのと同じように、聖書の言葉で応じた。フィルマーが述べるようなことは聖書のどこにも書いていないし、何よりもそうした行いは「理性」に反することだと論じた。

B 第二部

ロックは、第一部で、現在の地上の支配者たちは、権力の源といわれているアダムからの支配権や父権といった恩恵をいっさい受けられないということを証明した。したがって、世界中のあらゆる統治はただ武力と暴力によつて得られたものだから、たえず永遠の無秩序、害悪、争い、騒動、反乱の種がまかれてしまうとロックは指摘する。では、神から与えられたものでもなく、武力や暴力によるものでもない統治とは、いったい何なのであろうか。

i 政治社会の起源について——自然の状態——

ロックの自然状態とは、平和な状態のことで、その中で人々はそれぞれ平等な状況下で自由に暮らしている。しかし、平和な自然状態が切り崩される場合がある。それは、「自然の状態」と対立軸にある「戦争の状態」になった時だ。この状態を解決するために、人々は「自然の状態」から離れ、社会の状態へと向かおうとするとロックは論じる。だが、せっかく人々が社会の状態に向かつて、そこでも「戦争の状態」が起こりうるとロックは指摘する。それは、「社会あるいは国家の成員に帰属する自由を奪い去ろうとする者」⁽²⁾によつて行なわれる。その者こそ、絶対君主であり、ロックは専制による政治を痛烈に批判していると考えられる。

ii 政治社会の起源について——所有権——

人間が所有権を持つようになった根拠として、ロックは労働を挙げる。労働が所有権を生む理由について、「労働は労働した人の疑いもない所有物なのであるから、少なくとも（自然の恵みが）共有物として他人にも十分に、そして同じようにたつぷりと残されている場合には、ひとたび労働がつけ加えられたものに対しては、彼以外のだれも権利をもつことができないのである」⁽³⁾と論じる。つまり、世界、大地、人間以下の被造物はすべて共有物であるのに対し、人間自身の身体に対する所有権というのは、われわれ自身が持っている。だから、そこから生み出された労働によつて得られた「もの」の所有権は、その人間に属するというわけである。

なお、ロックは人間の労働や勤勉は神と理性による命であり、人間は神の命に従うべきであるとしている。M. ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じた、「（労働は）いや端的に、何にもまして、神の定めたまうた生活の自己目的」（括弧内筆者）、「労働意欲がないことは恩恵の地位を喪失した徴候」⁽⁴⁾というプロテスタンティズム的勤労観が、ロックの主張の中からも読み取ることができる。

第二章 『書簡』の構造と視点

『書簡』は、ロックがオランダに亡命していた一六八六年に友人リンボルクに宛てたラテン語の手紙である。一六八九年五月に、オランダのハウダで匿名のまま出版され、その後、ユニテリアン⁽²⁵⁾（プロテスタントの一派で、反三位一体論。イエスの神聖を否定し、神の単一性を主張。）のポプルが英訳、十二月に英訳版『書簡』をロンドンで出版した。

第一節 「国家」と「教会」

ロックの寛容論の背景として、ロック自身が政治的問題と宗教的問題が混入したイングランドの動乱の中で亡命を余儀なくされるほど危険な目に合い、「被迫害者」という経験をしたことが考えられる。野沢協がロックと同時代に活躍した、フランスの哲学者ピエール・ベール (Pierre Bayle: 一六四七～一七〇六年) の寛容論を、「当事者の寛容論⁽²⁶⁾」と呼んだのと同じく、ロックが「被迫害者」という経験をしたということを指摘できる。

では、ロックは寛容についてどのように考えていたのであるうか。ロックは『書簡』冒頭で次のように語っている。

あなたはわざわざ、それぞれに異なった信仰を持つているキリスト教徒の相互の寛容についての私の考えはどうかとお尋ねくださったのですから、私はその寛容ということこそ真の教会の主要な特徴と考えていることを率直にお答えせねばなりません⁽²⁷⁾ (傍線筆者)。

ロックは寛容こそ「真の教会」(true Church) の主要な特徴であると述べている。つまり、不寛容を行なう教会は、「真の教会」ではない。ロックにとつて、「真」とは重要なテーマであった。『書簡』内では、「真」とは何か、「真」であるためにどう振舞う必要があるのかを繰り返して論じている。本文中によく登場する、「真実」、「真の教会」、「真のキリスト教徒」、「真の宗教」などの記述から、ロックが「宗教」に対して、真実性を求めていたということが指摘できる。

しかし、「真の教会」ではないと暗示しながらも、教会や諸教派の「正統性」については、「それぞれ自分にとつては正統なのですから」⁽²⁸⁾と述べ、真偽のほどを定かにはしていない。たとえ、理性の力をもってしても、真知の判断がどれだけ困難を伴うかを『人間知性論』含め、数十年かけて研究し、理解しているからこそその理論であると考えら

れる。不可知論的理論のほかにも、『書簡』内では、詳しい理論やその理由について論じられていないところが数箇所で見られるので、その土台となっている『人間知性論』や『政府二論』と合わせて考察する必要がある。

さらに、ロックは寛容に関連して次のように述べている。

宗教の問題に関して、他と意見の異なる人々に寛容であることは、イエス・キリストの福音と人類の真正なる理性とにまことによくかなったことであります「中略」。要するにつまり、国王への忠誠や服従という口実で、あるいは神への細心・誠実な礼拝という口実で自分や他人を欺くことがないようにするためには、私はなによりも政治の問題と宗教の問題とを区別し、その両者の間に正しい境界線を設ける必要があると思うのです。⁽²⁸⁾

宗教の問題で、寛容であることは、福音と理性に適ったことである、というロックの考えは、『人間知性論』の中で、「信仰」と「理知」の両立を図ろうとしたロックの姿勢を引き続き示している。しかし、ロックは、それができない、高慢と野心や激情や無慈悲な狂徒を非難せず、「人間がな

かなか完全には免れがたい欠陥⁽²⁹⁾」であると述べる。ロックは、人間の能力の限界を認めているのである。だが、ロックは、世俗的な事柄と宗教的な事柄による口実によって行なわれる迫害や非キリスト教的残酷な行為については、決して許してはならないという態度を明らかにしている。

さらに、ロックは寛容に関する課題に対して、政治の問題と宗教の問題が区別されていないからこそ、お互いの間に絶えず争いが起こってくる、という指摘をしている。ロックの寛容論の理論を具体的に把握するために、当時のイングランドの宗教事情を概観する。

1 イングランドの宗教事情

A イングランドの宗教動乱

チャールズ一世 (Charles I: 在位一六二五～四九年) は、父ジェームズ同様に、王権神授説を信奉していた。前述したファイルマーはチャールズに仕え、ナイトの称号を与えられている。この時代、専制政治が展開され国民から批判された。また、宗教面では、多くの親カトリック政策をとった。イングランド国内では、国王がカトリックの復活を目論んでいるという疑惑を高めることになった。一六三三年にウィリアム・ロード (William Laud: 一五七三～一六四五年) をカンタベリー大司教 (国教会の最高聖職者) に任命すると、ますます疑惑が深まった。ロード自身はカトリックの

復活を意図していたわけではないが、国王の側近として厳格な国教会の統制強化を行なった。例えば、教義面ではカルヴァンの予定説を疑問視するアルミニウス主義的神学が強調された。ピューリタンの多くはカルヴァン主義を信奉していたため、教義面でも対立は深まるばかりであった。

こうした背景が重なり、一六四二年に内乱が開始、一六四五年にロードが処刑、チャールズ自身も一六四九年に公開処刑された。この頃ちょうどロックはロンドンのウエストミンスター・スクールの学生だった。その一、二時間前、この学校ではチャールズのために祈りがささげられたという。⁽³¹⁾おそらくロック自身が、国王が国民の手によって処刑されるという衝撃的な出来事を目撃したのではないだろうか、と論ずる研究者もいる。⁽³²⁾また、チャールズの処刑を国民による「父親殺し」という構造に見立て、十七世紀に生きたロックと精神分析学者S. フロイト(Sigmund Freud: 一八五六―一九三九年)を結び付けるといふ発想を、N. O. ブラウンが論じている。⁽³³⁾チャールズの処刑は、革命の終焉という意味や他方面に及ぼした影響も大きかったと考えられる。

B 宗教対立と諸セクト

イングランドの宗教事情を国王ごとに概観したが、内乱前のチャールズ一世までの宗教対立は、概ね国教徒対

ピューリタン(非国教徒)対カトリックという構造で起っていたということを指摘することができる。だが、ピューリタンが勝利を収めた内乱終了後の共和制の時代からは、ピューリタン内部の対立へと変化していく。

2 「国家」と「教会」

「神の栄光」、「教会の純粹さ」、「魂の救済」に対して、大きな関心を抱いていたロックにとって、国王が変わるごとに宗教が変わり、それによって国民が翻弄されるという事態は忌々しきことだったのだと考えられる。そもそも、『人間知性論』でのロックの理論では、「啓示」への「同意」が「信仰」となる。世俗権力の頂点にいる国王によって、個々人の「魂の救済」が決定される状況に、「同意」などなく、「信仰」など存在しないのではないか。だからこそ、こうした文脈において、ロックの「政教分離」や「宗教の自由」という理論は意味を強めることとなる。

A 国家の役割

i 為政者の義務

ロックの市民社会は所有権(プロパティ)の保全が最重要課題だ。したがって、為政者の権力、権利、支配は決して魂の救済にまで及ばない、というのがロックの主張である。市民社会において、所有権の保護を委ねられた為政者(国家)の役割を制限しているのである。為政者の権限が

社会的事柄以上に及ばない理由について、ロックは「魂の救済」についての問題とともに以下の三点を挙げている。

① 魂への配慮はいかなる他人にもゆだねられない

ロックは「真の宗教の生命と力のすべては、心のうちに完全に納得するという点にあり、信ずることなしには信仰は信仰ではない³⁴」と述べている。ロックの「信仰」とは、人間の理知を超えた「啓示」への「同意」という手順を踏んで得られるものなのである。「同意」をする者は他でもない主体者である人間、つまり、魂の救済を求める本人以外の何者でもない。だから、本人不在の「信仰」や他から強制された「信仰」が行なわれうる危険性につながる為政者による魂の配慮は認められない。よって、個人の魂への配慮と為政者の介入による魂への配慮は分離すべきであるという理論になる。

② 魂への配慮は為政者の関知する問題ではありえない

ロックは、為政者の権力を「外的な力」とし、それに対して、真の救済的宗教は「心の内的な確信のうちにあるもの」として区別している。為政者のなしうることは、命令的性格を持つ、法を定め、服従させ、剣で強制することである。しかし、心の内的部分に向かい説得的性格を持つ問題に対しては、刑罰はふさわしくないという。その理由について、「いかなる信仰箇条の告白も、いかなる外面的礼

拝形式の遵守も、そういう告白をし礼拝をする人々が心底から告白の真実性を信じ、その礼拝が神に受け入れられることを信じているのでなければ、魂の救済に役立たない³⁵」と述べている。あくまで、「魂の救済」を望む、一個人が受け入れたものでなければ意味がない。だから、国家が権力を用いて、宗教的な事柄を強制することをロックは否定するのである。

③ 魂の救済への配慮が為政者の仕事に属さない

為政者が魂の救済に関わることの危険性について、ロックは以下のように述べている。

真実は一つしかなく、天国への道は一つしかないのです。もしも人々が法廷の定める宗教以外に従うべき規則を持たず、自分の理性の光を捨て、自分の良心の命令に背き、支配者の意志に盲目的に身をまかせ、無知か野心か迷信家がたまたまその国にうち立てた宗教に従うことを強制されたとしたならば、はたしてより多くの人々が天国に導かれるという希望があるでしょうか。宗教上の意見がさまざまに対立し、世界の諸君主も、その点では世俗的利益においてと同じくばらばらなのですから、天国への狭き門はさらにせばめられるこ

ことになるでしょう。一つの国だけが正しいことになり、その国以外のすべての人々は、それぞれの君主に従って滅びの道を歩まなければなりません⁽³⁶⁾。
しょう。

『人間知性論』の理論を用いると、個々人が自らの魂の救済を放棄するというのは、人間が神から与えられた能力を放棄することと同じことだと考えることができる。したがって、個々人は自らの魂の救済に積極的に、いや、むしろ、義務として関わるべきであり、為政者はそれを妨げるような行いをしてはならないとロックは考えた。

B 教会の役割

i フリー・ヴォランタリ・ソサエティ

ロックは教会に対して、「人々の自発的な集まりであり、人々が神に受け入れられ、彼らの魂の救済に役立つと考えた仕方では神を公に礼拝するために、自発的に結び付いたものである、と考えます。それらは自由（フリー）で自発的（ヴォランタリ）な結社（ソサエティ）なのです⁽³⁷⁾」という見解を示している。ちなみに、ロックはもし自分が参加した教会に間違いを見いだした場合、参加が自由なのと同じく、抜け出すのも自由だとしている。つまり、ロックにおいて教会への参加を「自発的な」ものととらえる場合、各

人は自らの魂の救済には、自らで責任を持たなければなら
ないということになる。

「教会」という視点から、ロックが論ずる、フリー・ヴォランタリ・ソサエティを捉えると、一体どのような立場を示すのであろうか。M. ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで、「教会」（キルヘ）と「信団」（ゼクテ）について、「教団、つまり、宗教改革期プロテスタント諸改革の用語を使えば「見ゆべき教会」は、「中略」、もっぱらみずから信じかつ再生した諸個人、そうした人々だけからなる団体だとされた。別言すれば、「教会」（キルヘ）ではなくて、「信団」（ゼクテ）だと考えられたのだ⁽³⁸⁾」（傍点ヴェーバー）と論じている。

このヴェーバーの論をロックの教会論に当てはめると、ロックが想定する「真の教会」は、一般的な見解では、「信団」（ゼクテ）だということになる。当時のイングランドでは「セクト」（ゼクテ）による分離教会の設立や水平派による民主権論の主張は、宗教的寛容や政治的自由の基礎をつくりあげ、近代民主主義につながる要素をもっていた。

これらを踏まえると、ロックの教会論は、国教会的性格や、ピューリタンの性格をもつというよりは、むしろ、セクト（分離派）的性格をもっていたと考えることができる。

ii 教会の持つ力

さて、人々の「同意」の下に「社会」が成立したとき、われわれは平和的秩序を保つためにルールや法といったものを作り、従わなければならない。ロックは教会のことを自発的な「社会」といつているのだから、教会も市民社会と同様にルールや法を作らなければならない。ただ、教会が自発的な社会であるがゆえに、ルールや法は自分が信じると決めた教会に入つた者のみに及ぶという範囲が限定されるということである。ロックは、「教会という団体へのメンバーの参加は、さきに示しましたように、完全に自由で自発的なのでありますから、その法を作る権利はこの団体そのものにしかありません⁽¹¹⁾」と述べている。

ロックの同意的性格を持つ教会という主張に対して、「主教とか長老とかが使徒以来の支配権を今日まで連綿と受け伝えた教会でなければ、真の教会とは言えない⁽¹²⁾」という使徒的継承権 (Apostolic Succession) に基づく反論が出てくるであろうことをロックは想定する。それに対し、ロックは、キリストの名のもとに人々が集まつた教会は、どのように呼ばれようとも (正統だとか、正統でないだとか)、真の教会たるに不十分なことはないということだと主張する。こうした文脈からは、教会が国教会、プロテスタント、カトリック、諸セクトという看板を背負つていようとも、それぞれを認めるべきだということがロックの主張だと指

摘できる。しかし、後でみるように、ロックは寛容の限界を提示しているのです、どのような教会も認める姿勢だとは言ひ切れない。続けて、ロックは個々人が教会を選択することができる根拠について述べている。

神の定めた制度とか教会の指導者の地位の不斷の受継とかを非常に力説する人々の間にさえ、つねにいかに大きな分裂があつたかということです。そうした見解の不一致があつたればこそ、われわれはどうしても慎重に考慮せねばならず、したがつてまた、熟慮の末によしとする教会を選ぶ自由が許されることになるのです⁽¹³⁾。

ロックがここで具体的に何についての指摘をしているかということとは本文中から読み取ることはできない。しかし、歴史的な文脈からとらえると、「大きな分裂」とは、お互いに正統性を主張しあい、相互共に強い力を持ったまま教会が分裂した、ローマ・カトリックと正教会の東西教会の分裂 (十一世紀)、フランスとドイツ、イギリスが対立し、互いに教皇を擁立した、教会大分裂 (一三七八―一四一七年)、さらには、十六世紀のローマ・カトリック教会への批判に対して起きた宗教改革を示していると推測すること

ができる。その当時に絶対的権力を持ち、正統性を主張していた人々でさえも、こうした間違いを犯してきたという実例を根拠として自らの主張をするというロックの姿勢から、実に理性的であり、宗教に関して熱狂や狂気的な態度を取らず、常識的な態度が伺える。

iii 真の教会

ロックはそれぞれの教会が自発的に集まった結果であれば、真の教会であるには十分であるとした。しかし、教会を選ぶ側の人間としては、魂の救済のための真なる教会を判別する基準が必要である。

では、真の教会を構成する要件とはどのようなものなのだろうか。ロックの答えは非常に簡潔である。それは、「教会を結成する条件を、聖霊が聖書のなかではつきりと救済のために必要だと明言していることがらに、それだけに求めるほうが、キリストの教会によりふさわしい」ということである。

ロックは、次に教会法の議論へと移している。ロックにとって教会法に求めた目的は、「魂の救済」に役立つものでなければならなかった。そうした教会の法を守らせるためには、どうしたらよいのだろうか。

「外的事項」に関わることであれば、為政者は刑罰などいわず暴力的行為を加えることができる。反対に、「内的

事項」に関わることであれば、教会に属する人は説得、勧告、忠告という手段を用いなければならないことは、前述したとおりである。だが、宗教的団体内でこうした手段を用いても違反者が回心せず、誤った確信が変わらないならばどうしたらよいのだろうか。そこで、最終的に団体が加えることができる制裁が、「そういう頑固で強情な、変革の見込みのない人々をその団体から切り離し、追い出すしか仕方ありません」という、追放なのである。この考え方も非常に聖書に忠実な考えで、ロックは追放こそが、「教会の権威の最後の、究極の力」だと論じている。

第二節 寛容の義務

1 寛容の義務の範囲

i 暴力的権力

ロックは寛容が真のキリスト教徒の義務であるとした。しかし、寛容を義務として、誰でも寛容の対象としてはならない。だから、寛容の義務の範囲を設けなければならない。ロックは、「勧告を受けた後でも頑強にその団体の法に違反しつづけるような人を、教会が寛容の義務によってうちに抱えこんでいなければならないことではない」と述べている。なぜならば、『政府二論』で述べられているように、ロックにとって法やきまりはそれを守ると誓い

合った団体内における秩序や「平和な状態」を保つための大前提なのである。「戦争の状態」へと向かう、法への違反を非難せず容認することは許されることではない。

ロックは宗教的団体内で法への違反に対する罰則を認めながら、「こういう場合つねに、破門の決定とその実行は、破門された人の身体や財産になんの危害も加えられないよう、粗暴な言動や行動によらずなされるよう注意しなければなりません」と論ずる。国家の役割は、人々の社会的利益を守るための目的としている。だから、もし正当な理由があつて社会的利益が奪い去られるのであれば、それができるのは国家であるということになる。宗教的団体には国家が持つような権力は認められない。

続けてロックは、「いかなる私人も、教会や宗教の違いを理由として、他人の社会的権利の享有をそこなう権利をもつてはおりません。人間あるいは市民としてその人に属する権利や特権はすべて、侵すべからざるものとしてその人に保持されなければなりません」と、宗教を理由に所有権（プロパティ）を侵害することは道理が違ふのだと論じている。侵害や暴力を加えるよりもむしろ、「慈愛、博愛、寛大」⁽⁴⁸⁾が加えられべきだという。さらに、「もしだれかが正しい道からはずれることがあつても、それはその人自身の不幸であつて、あなたの害にはなりません」という、

あくまでも、「その人自身」に降りかかるものであるとする。やはり、ロックは魂の救済に「自己責任」を求めていると考えられる。

上記の内容は個人間の寛容についての内容だが、これらの内容は、諸教会間の寛容についてもあてはまる。しかし、諸教会間で重要なのは、ヘンリー八世以降イングランド国内を混乱させた、為政者と教会の関係である。為政者としてキリスト教徒であり、自らの魂の救済のために何を信じるかという自由は許されている。だが、問題は為政者がどの教会の一員となるかということにある。ロックは、「国家は教会になんら新しい権利を与えうるものではなく、逆に教会が国家に新しい権利を与えることありえない」と⁽⁴⁹⁾いう見解を示している。根拠として、かりに、権利を与えられる教会があるとすれば、その教会は、誤るものや異端に対して支配権を持つということになる。つまり、必ず、「正統な教会」である必要があるという点である。しかし、この「正統性」こそ、われわれを混乱に陥れるのであつて、「どの教会もみなそれ自身にとっては正統なので、誤っているとか異端であるとかいうのは他の教会に対してのこと」⁽⁵⁰⁾となつてしまふのである。ロックは、人間の感覚を超えた真知や正統性の真偽のほどは分らないという「不可知性」を認めているので、だれも他に対する正当性を認めること

は出来ないのである。

ii 世俗権力と教会が結び付くことの危険性

世俗権力と教会が結びつくことの危険性について、ロツクは以下のように指摘している。

いま為政者が一方（意見を異にする教会のいずれか）に味方をし、その手に剣を加えて、（その同意により）思いのままに反対者をこらしめることができると仮定してみよう。（中略）。もともと激烈な真理の擁護者、誤謬への反対者、分派への論難者は、自分の側に為政者がいるときでなければ、神に対するその燃えるような情熱をほとばしらせることがめつたにないということです。お上の寵愛を得てよい地位につき、自分の力が強くなつたと感じられるや、たちまち彼らは平和と慈愛をなぐり捨てることになるのです。⁵¹⁾

「迫害」は権力者によつて行われるが、権力者は常に正しいと言えるだろうか。正統か正統でないかの真偽のほどはだれにも分からないということは、ロツクが繰り返し述べていることである。もしも世俗権力がある教会と結びつき、その教会の意に沿わない人々を攻め立てるといふこと

をしたらどうなるのか。社会的利益や生命が奪われてしまうということは、現実として起きていたことであるが、その行為が、もしかしたら間違つた信仰の道を歩む者が、正しい道を歩む者に残虐な行為を行つてゐるかもしれないのだ。「不可知」の観点からも、『政治二論』の、神による被造物性を理由とした「自己保全」の観点からも、世俗権力と教会による迫害は決して許されるものではないのだ。

iii 私と公の区別

ロツクは『政府二論』で所有権（プロパティ）の保全の重要性を論じた。同様の議論として、『書簡』では、生活と同様、宗教的なことについて他人は口出しするべきではないと主張している。⁵²⁾ 私的な生活で自由が許されている（他人に危害を加えないなど合法的な自由）のと同様、誰が、どの教会に行つて、何をしようとも許されるべきということである。

iv 救済の個人化の意義

ロツクは国王（為政者）が他の人びと（国民）よりも権力を持つという点では、生まれながら上位にあるということとを認めながら、自然においては平等だと論じる。⁵³⁾ その理由について、支配の権利も支配の技術、それ以外の事柄についても確実な知識を伴うものではないし、何より真の宗教の知識を伴うものではないからだという主張である。

ロックは、「(国王に)」もしそれが真の宗教の知識を伴うのだとしたならば、地球上の君主たちが宗教の問題についてこんなにも意見が違ふことに、どうしてなるでしようか⁽⁵⁴⁾と論じている。国王であろうとも、真の宗教を知っているわけでもないし、魂の救済のための正しいただ一つの道を知っているわけではないのだ。だから、「個人の救済は、個人の手にゆだねられるべき」なのである。

v 世俗権力と教会の批判

為政者に宗教的事項を任せられないというロックの主張を確認した。では、人々が魂の救済を求めるためには、どのような教会に従うべきなのであろうか。まず、ロックは「宗教の問題においてすべての人が従うべき無謬の判断は、この為政者にあるのではなく、教会にあると考えられる」という前提を示す。前半部では、為政者の行うことと、教会の行うことは切り離すべきだという主張をしていたのだから、ロックの主張に対して、「教会に従えばよい」と反論されるのもつともである。この反論に対し、ロックは次のように述べている。

使徒の時代には畏敬すべきものであつた教会の名が、その後の時代にはいかに多く、人々の目にくもらせるために利用されてきたかということ

知らない者があるでしようか。「中略」。為政者はいまや宗教の問題においては自分の命令に従えと言うのではなく、教会の命令だけに従えと言うのだから、これで万事は安全、確實だ、とあなたは言われるのです。それならこちらから、いったいどの教会の命令に従えばよいのか、お尋ねしたいものです。おそらく為政者のいけばん氣にいった教会の命令に、というのが答えでしよう⁽⁵⁵⁾(傍線筆者)。

本当のことを言いますと、教会というものは、「中略」。むしろ宮廷から影響を受けやすいものだということを認めないわけにはいきません。「中略」。わが近代イギリスの歴史にま新しい数々の実例が見られます。ヘンリー八世、エドワード六世、メアリ、エリザベスの統治下に、僧職者たちはその国王や女王の好みのままに、いかに容易にすらすらとその法令、信仰箇条、礼拝形式、その他すべてのことを変えたこと⁽⁵⁶⁾でしよう。

イングランド国内では、為政者が変わるとに魂の救済の道が変わっていた。これでは、誰のための、何のための信仰なのか分からなくなってしまう。しかも、国民は為

政者によって変化する「信仰」（この場合ロック的には信仰とは言えないが便宜上信仰と記す）を強制されていた。自分が信じると決めた「信仰」というよりも、為政者のお氣に入りになるように教会側が都合よく変えたもののなので、ロックの定義する「信仰」からは遠ざかつてしまふ。また、ロックは人間に対して、自らの救いの道を求め、心のうちから納得できる方法や手段を採用している教会に参加することが重要だと論じているため、「教会に従う」という反論を退けているのだ。

さらにロックは、「宗教に関する為政者の意見が正当なものであり、また彼の命ずる道が真に福音になつたものであるにしても、もしも私にそれが十分得心がゆくのでなければ、その命令に従うことは安全ではないであろう」という興味深い仮定を提示している。正しいものが目の前にあつたとしても、人間は真偽の判断をせねばならない。つまり、自らの信仰の道を決める能力を神からあたえられた人間は、その能力を十二分に發揮せねばならないのである。

2 教会が考慮すべき事柄

ロックの教会の存在意義として公の場で礼拝を行うためという理由がある。だが、ロックにとつて、皆が集まり、教会で何かを行う際の方法などはさほど重要ではない。ロックにとつて礼拝の方法などを争うことは無意味である

し、宗教の実質的な部分においては、そういったものはいくらでもよいこと、つまり、非本質的な事柄なのである。

ロックは教会には特に考慮すべきこととして、礼拝の外面的な形式と儀式、そして、教義と信仰箇条の二点を挙げている。

A 礼拝の外面的な形式

i 為政者の入る余地はない

ロックは外面的な礼拝について、「教会は自由な団体であるからというばかりではなく、神の礼拝のためになされることはすべて、それを実行する人々がそれこそ神に受けられるものと信じているかぎりにおいてのみ正当化されるもの」と見なしている。だから、為政者は外面的な礼拝について、批判する権力は持っていない。あくまでも、外面的な礼拝を行う場合においても、行うか行わない、救われるか救われない方法なのかどうかの判断は、個人の判断にゆだねられているからだ。

ii 公共の福祉

上述した理論と同様で、ロックは、すでにある教会が受け容れ、承認し、実行している儀礼や儀式の使用を禁止する権力も持っていないということを合わせて論じている。しかし、ここで特筆すべきは、教会で行われている儀礼や儀式であっても、為政者によって禁止される特別な場合が

ある、ということだ。ロックが例に挙げているのは、「幼児を殺害し、生贄にすること」と「不浄なる雑婚」^⑤である。これらは世俗社会において非合法な行いである。世俗社会で非合法と認められる事柄については、教会においても非合法となるということをロックは強く論じている。また、「国家の利益の為に要求される事態」^⑥になった場合にも為政者が介入することができる。

やはり、ロックの主張のもとには『政府二論』でみたように、契約に基づく市民社会が念頭ににある。したがって、宗教に関わる事柄が市民社会に影響を及ぼす場合（負の意味で）には、政治問題において、禁止することができるのである。為政者は決して宗教問題として禁止はできないのである。

第一章の『政府二論』および、第二章の『書簡』の考察により『政府二論』に引き続き、『書簡』においてもロックは、人の生命、自由、財産、利益を重要視する傾向があると考えられる。それは、偶像崇拜が為政者によって罰せられるべきではない理由について、「それらが他の人びとの権利をそこなうものでなく、また社会の公共の平和を乱すものでもない」^⑦と述べている点にも如実に表れている。

B 信仰箇条

信仰箇条についてロックは思弁的なものと、実践的なもの

の二つに大別した。

宗教の諸箇条で注目すべきは、実践的な意見に対するロックの考え方である。ロックは、「すべての人は不死なる魂を持つており、永遠の幸福に達することも、永遠の破滅に陥ることもできます。その幸福は、神の恵みを得るに必要なことがら、またそのために神によって命じられたことがらをこの世において信じ、行なうかどうかにかかっています」^⑧と論じている。さらに、「これらのことを守ることが人類に課せられた最高の義務であり、それを探求し実行するためには極度の注意と努力と勤勉が必要」^⑨と続けている。つまり、魂の救済とは、神に対する人間（個々人）の義務なのである。

第三節 寛容と不寛容の境界

1 寛容の限界

ロックは寛容の必要性を訴えながら、適用範囲が制限される場合について以下を挙げている。

第一に、「人間の社会に反対的な意見、あるいは市民社会の維持に必要な道徳的規則に反対する意見」^⑩。ロックは、「実際上はこうした例はどの教会にもほとんどない」として、それ以上は論じてはいない。

第二に、「人々が自分たち自身および自分たちの教派に、

もってもらしい欺瞞的な言葉で装ってはいるが、実際には共同体の市民的権利に反するような特別な特権を、ひとりにじめするときに生ずるもの⁽⁶⁵⁾である。ロックによると、約束は守らなくてもよいとか、宗教を異にする者によって国王を廃立することができるだとか、すべての所有権の掌握を狙うといった、明らかに道理から反れ、批判の対象とされるような事柄を「公然と」教える教会はない。しかし、同じようなことを言っている人々はある。「異端者に対しては信義を保つべきではないと教える者⁽⁶⁶⁾」は、自分たちに「信義を破る特権」があるということになる。「破門された国王はその王位と王国とを失う」と主張する者は、「国王を廃立する力をわがものと称している」（破門の権利が僧職者階級の特権であることを要求しているから）。「支配権の基礎は恩寵にあるという主張」も、「明らかにその主張者がすべてのものの所有を要求するためのもの」となる。つまり、ロックがここで批判の対象としているのは世俗に關する事柄と、宗教に關する事柄を区別せず、一方的に特権を振りかざす者だと考えられる。

第三に、「その教会に入ると、そのことによつて、みなよその国王の保護下に入り、またその国王に奉仕することになる」という前提に立つて造られている教会⁽⁶⁷⁾（傍点ロック。）である。理由は、「為政者は自分の国の中に外国の支

配が樹立されるのを容認することになるでしょうし、自国の国民が、いわば自分の支配に反対する兵士として登録されるのをゆるすことになる⁽⁶⁸⁾」からである。ロックは明示してはいないものの、ローマ・カトリックを批判の対象としていたと考えられる。ロックが、「その教会に入ると、そのことによつて、みなよその国王の保護下に入り」、「自分の国の中に外国の支配が樹立される」と指摘するのと一致する出来事が、イングランド国内で起きていたからである。イングランド国内にはカトリックよりの政策を行なったメアリー一世や、チャールズ一世のような国王がいた。メアリーの場合、夫がスペイン国王だったため、イングランドがスペインの支配下に置かれる危機を招いている。

しかし、イングランド国王が他国の王と共謀して、イングランドをカトリック化しようとした顕著な出来事があった。チャールズ二世（Charles II.）在位一六二五—四九年）の治世だった一六七〇年に起きたドーヴァの密約事件（Secret Treaty of Dover）である。これは、イングランド国王チャールズ二世とフランス王国（ルイ十四世の治世）との間で結ばれた密約である。内容で注目すべきは、「チャールズ二世の改宗とルイ十四世からの資金・兵の援助⁽⁶⁹⁾」という第二条の記述である。これは、イングランド国王チャールズ二世が、カトリック教国フランスとの取り決

めで、カトリックへの改宗を宣言することを条件に、フランスからの軍事援助と年金を受け取るということである。つまり、「よその国王の保護下に入り」と論じたロックの主張と一致すると考えることができる。当時のイングランドの社会状況と、国外状況を踏まえると、ロックが暗に反カトリックの意図を持っていたと推察することができる。

最後に、「神の存在を否定する人々」（傍点ロック）である。つまり、「無神論者」は寛容の対象にはならない。神の存在は生得ではないということを、ロックは『人間知性論』内で論じた。しかし、ロックにとって「神の存在」とは、「人間社会の絆」において大前提なのである。

第三章 『書簡』におけるキリスト教徒としてのロック像

第一節 神・人間・理知と真の信仰の獲得

1 理知を介した神と人間の関係

われわれは、『人間知性論』、『政府二論』、『書簡』から、ロックが、知性や理知の優位性、「信仰」と「理知」の両立（超理知的性格をもつ存在を認める）を論じていることを確認してきた。ロックの文脈には、神の被造物である人間が、「神から与えられた能力を用いる」という義務を負っているという主張があると考えることができる。これが、理知を介

した神と人間の関係なのである。

2 人間の義務

では、前述した文脈に視点を置きつつ、『書簡』での神と人間の関係に考察を移す。ロックは人間の義務に関わる、「不死なる魂」と市民社会に関わる、「現世的な生活」を持っている二つの面から、神に対する人間の行いについて論じている。

「不死なる魂」を持つ人間が負うべき義務が、「魂の救済」、つまり、「魂への配慮」である。それらは、神と個々人の間で結ばれる契約と義務であり、個人で自己責任を負うべきものとされている。

「人間の被造物性」や「神から与えられた理知」を重要視しているロックにとって、個々人が「真」だと心から納得し、信じることができる信仰を見つけようとするということ、そのために思考・判断すること、そして、その結果得ることができた信仰のもとで神を称えることをなさねばならなかったのである。ロックが、「他人の言いなりになって信仰を変えざる者」（神から与えられた理知を使うことを放棄しているから）や「無神論者」（ロックにとって神の存在は大前提だから）を批判していることから指摘することができる。そして何よりも、「個人が行うべき救済への義務」を阻害していた世俗権力と教会（国教会）が結びついた体

制に対して、「真」の信仰を主張する一人のキリスト教徒としての批判であつたと考えることができる。

「不死なる魂」と共に、もう一つ人間が持つものが、「現世的生」である。ロックは、「現世的生」について、「もろくはかないものであり、継続期間も不確かなもの」と論じている。この「現世的生」を持続させるために、市民社会を構成する元、「所有権」（プロパティ）がその手段として必要だつたのである。ロックの市民社会には、「所有権」（プロパティ）によって、現世的生を保全させることが可能となつた上で、人間が神への義務として行ふべき、「信仰生活」（救済への配慮）があるという側面があつたということが指摘できる。

以上の文脈から、真のキリスト教徒として、個々人による神との契約、義務を果たすという目的で、『書簡』では、「良心の自由」や「政教分離」が必要とされたと指摘することができる。

第二節 ロックの「聖書」観

1 ローマ・カトリック的視点

ロックの聖書に対する明確な考えが表れているのが、教会を結成する条件について論じた箇所である。ロックが教会の成立条件として提示したのが、「教会を結成する条件

を聖霊が聖書の中ではっきりと救済のために必要だと明言していることがらに、それだけに求めるほうが、キリストの教会によりふさわしい」という前提である。

さらに、聖書によって成立していない教会についてロックは次のように批判を加えている。

人々が自分自身の發明や解釈を、あたかも神の權威によるかのように他の人に押しつけたり、聖書に述べられていない、あるいは少なくともはっきりとは命令されていないようなことを、まるでキリスト教の信仰には絶対不可欠なものであるかのように教会法によつて定めたりするよりは、（聖霊が聖書のなかで明言したことに従うほうが）キリストの教会によりふさわしい（括弧内筆者）。

こうしたロックの聖書に重きをおく考え方は、プロテスタントの三大原理の一つである、「聖書のみ」に従つた考え方だと指摘できる。

ロックの文脈からは、「聖書」と「聖伝」を並列するローマ・カトリックの考え方を危険視する態度を読み取ることができる。ロックにとつて正しい救いの道は一つしかない。しかし、人々はどれが正しくて、どれが正しくないかを知

ることはできないのである。だから、ローマ・カトリックの聖書に書かれていないことを含め、これが正しいのだという道を上からの権力で押し付けるといふ構造は、人々は救済の道の真偽を確かめることさえ許されない。そして、ロックが論じるように、「一つの国だけが正しいことになり、その国以外のすべての人々は、それぞれの君主に従って滅びの道を歩まなければなりません」といふ状況に陥る危険性があると考えられる。

「聖書のみ」や「使徒的伝承の否定」という反ローマ・カトリックの考えが数多く見られることから、ロックの理論はプロテスタント的思考を如実に表しているといえる。

2 国教会的視点

イングランド国教会はプロテスタントとローマ・カトリックとの間をとっており、これを中道 (via media) 主義という。国教会の中道主義は中道であるがゆえに、ピューリタン (プロテスタント) から、中途半端と批判され、ピューリタン革命の一因となった。われわれは、ロックが親プロテスタント、反ローマ・カトリックの立場であることを指摘したが、中道主義の道を歩んだ国教会に対し、ロックはどのような見解を示していたのだろうか。

教会と聖書の関係については、国教会の公式教義である、『三十九箇条』(一五六三年)⁽⁷⁵⁾の中で説明されている。

まず、聖書に対する見解については、第六条「救いのために聖書は完全であることについて」⁽⁷⁶⁾で、宗教改革でローマ・カトリックに対してプロテスタントが主張した聖書に重きを置く考えに従っている。⁽⁷⁷⁾

次に、教会と公会議については二十条「教会の権威について」⁽⁷⁸⁾と二十一条「公会議の権威について」⁽⁷⁹⁾で述べられている。第六条と同様、聖書重視の姿勢を示している。プロテスタント各派ではほぼ共通の原理となっている、「信仰のみ」、「聖書のみ」、「恩寵のみ」、「万人祭司」はローマ・カトリックの教会に対する権威を否定する考え方だった。

しかし、国教会は、「聖書の権威」を主張するのと同時に、「教会が持つ権威」についても明記している。そのことに関しては、第三十七条「国の統治者について」⁽⁸⁰⁾で、ローマ教皇がイングランドに介入できないことを明記している。元々、ヘンリー八世時代に「国王至上法 (Act of Supremacy)」が定められ、ローマ・カトリックからの分離・独立が図られていた。だが、「国王至上法」では、国王のことを「Reputed the Only Supreme Head in Earth of the Church of England called Anglicans Ecclesia」⁽⁸¹⁾ (アングリカンエクレシアと呼ばれる、イングランドの教会における地上で唯一の至高の首長であると見なされる) と記述している。それに対して、エリザベスは、これまでの至

高の首長 (The Supreme Head) の呼び名はローマ教皇のようにサクラメント執行権や聖職叙任権を含む教会のすべての最高管轄者であるかのような印象を与えるとの批判に応え、この表現に代えて〈至高の統治者〉(The Supreme Governor) という表現にした。要するに、国王は聖職位に関わる権威を持たず、ただ教会政体の最高統治者とした。⁽⁸²⁾しかし、石村耕治が、国王と国教会の関係性について、「現代まで継続し、国王(女王)を核とした立憲君主制の政体との強い結びつき (thick interdependence) を持ち続けている。このため、イングランドは、いまだ国家 (state) と国教会 (established Church) との相互依存関係が強い、西欧ではきわめて個性的な国家として今日にいたっている⁽⁸³⁾」と指摘しているように、政教分離国家であるとはいえない。第二章でイングランド国内で、為政者が変わるごとに、個々人の魂の救済の道が変えられていく状況に対して、ロックが批判をしたことを確かめた。加えて、以上の背景から、ロックが国教会体制に対しても、不満を持っていたであろうことが推測することができる。本論文において、われわれはロックが国教会に対して否定的であるとする立場を示してきた。しかし、ロックの国教会に対する態度⁽⁸⁴⁾に関しては、研究者によって異なる見解を示している。

第三節 諸教会の平等化と併存

『書簡』における、ロックの宗教観は、反ローマ・カトリック的、親プロテスタント的、国教会体制に不満を持つ立場であると指摘することができる。しかし、ロックは最後の方で秩序ある社会が守られるという前提で、諸教会の併存を願っている。ロックが、ここで挙げているのは国教会と非国教徒である。ロックはたびたび政教分離を主張してきたが、国教会も非国教徒も平等に扱えば、争いごとや社会の秩序を乱す行いがなくなるのだと論じている。つまり、ロックは非国教徒(プロテスタントや諸セクト)に対しても保護を求める立場で論を展開している。

どうか信じていただきたい、騒乱は決してあれ
これの教会ないし宗教団体の特別な性格から生ま
れてくるのではなく、重い圧制のもとにあえいで
いるときには、その首を絞めつけている首枷を自
然にふり払おうとする全人類共通の性向から生じ
てくるものなのです。⁽⁸⁵⁾

それぞれの宗教の平等化が図られることによって、平静や安泰が訪れるのだとするロックの主張からは、神の被造物である人間と、神より与えられた理知に対するロックの

「信頼」があると考えることができる。ロックは、「人間社会の絆である約束とか契約、宣誓とかは、無神論者をしめることはない⁽⁸⁷⁾」と論じている。つまり、ロックにとつて、神の存在こそが、人間社会の絆なのである。だからこそ、現世的生を受けて人間たちは、神から与えられた共有物や能力を生かして生きる。つまり、「魂の救済」に対する行いや、共有物や能力を生かして行なう労働は、「神の栄光」を現わすということになる。

「魂の救済」に関しては、信仰の正しさと間違いないことなく、それぞれの考える道と合致する教会に属すればよい。ロックなりの神と人間への信頼に寄せた、寛容論だったと指摘することができる。

第四節 異端と分派

『書簡』の最後の部分で、ロックは追伸として、「異端」と「分派」について論じている。

1 異端

一般的な「異端」の定義では、ローマ・カトリック教会を頂点とするキリストを信ずる者の組織の中で、「正統」に対する「異端」であるということになる。これに対して、ロックの「異端」の定義はかなり特徴的である。

まず、ロックは、「同じ宗教を持つとはどういうことか」

ということを確認している。「宗教に属するすべてのことはその規則（聖書）に含まれているのですから、必然的に、同一の規則に同意する人々は同一の宗教を持つことになり、ます（括弧内筆者）⁽⁸⁸⁾」と述べる。だから、「信仰と礼拝についての同じ規則を持つ人々は同じ宗教であり、信仰と礼拝について同じ規則を持たない人々は異なった宗教の人々」となる。また、「宗教を異にする人々が、お互いに異端であったり分派であったりすることはない⁽⁸⁹⁾」と論じている。続けて、より具体的に、カトリック教徒、ルター派、聖ヨハネのキリスト教徒、ジュネーヴのキリスト教徒はそれぞれ異なった宗教を持っているのだということを主張する。

以上の前置きをした上でロックは、「異端とは、同じ宗教の人々の間で、規則そのもの（聖書）には含まれていないある意見のために、教会の結合においてなされた分離のことだということ（括弧内筆者）⁽⁹⁰⁾」という定義づけをしている。このようにして起きる分離には二通りあるとして、①教会のなかの多数派、あるいは「為政者の保護による」有力派が、聖書の明示された言葉には見いだされないある意見を信じようとしないう人々を、その理由によって自分の教会から排斥し分離する場合、②聖書がはっきりとは教えていないなんらかの意見を、教会が公に告白しないからという理由で、だれかが教会の集まりから分離する場合、を

挙げている。つまり、聖書にはないような命題を主張し出し、その命題を理由に人を追放したり、自分自身が身を引くという行為をする者が、異端者となるのである。

2 分派

一般的な定義では、分派は、教義・信仰その他の理由により、教会から分離・独立して存在する小教団のことである。分派は必ずすでに存在する母教会への対立・分裂という形で成立する。

ロックは分派について、「分派とは、聖書以外の何ものをもその信仰の規則と認めない人々の間で、聖書の明示された言葉には含まれない意見のために、そのキリスト教的結合においてなされた分離^⑨」と論じている。異端と分派の違いは、異端が宗教の教義的部分だけに使われ、信仰の誤りに関係するのに対し、分派は礼拝もしくは、規律の誤りに関係するものとされている。要するに、異端も分派も「聖書」に書かれていないことをめぐる分離だということだ。

しかし、異端と分派に関する記述で注目すべきは、ロックがこれらの行いを「罰」と呼んでいることである。なぜならば、第二章で確認したロックの教会観は「フリー・ヴォランティア・ソサエティ」であったからだ。この教会観では、自らが参加した教会に間違いを見出した場合、参加が自由なのと同じように、抜け出すのも自由であったはずである。

つまり、ロックにとって、聖書に書かれていないことで騒ぎ立て、宗教団体を離脱するものは、「フリー・ヴォランティア・ソサエティ」における教会離脱の自由を許される者ではなく、「罪」深い、「異端者」、「分派者」となるのである。まさに、ロックは聖書に対して厳格な態度をとっていると指摘できる。そして、その態度が最もよく表れているのが、一番最後の記述である。

要するに、聖書がはっきりした言葉で教えていることを否定しない人、また聖書に明白には含まれていないことを理由にして分離しない人は、キリスト教徒のある宗派によつてどんな名前と呼ばれようと、まただれか、あるいはみんなから、まったく真のキリスト教ではないと宣告されようと、真実には決して異端でも分派でもありえないのである。^⑩

誰にも信仰の正統性は分らない。しかし、真の信仰の指針として「聖書」の教えに忠実であり、神から与えられた能力を生かし信仰を守る。それが、神の被造物である「人間の義務」と考えたロックの寛容論であった。

終章 — 整理と課題 —

ジョン・ロックの『書簡』における寛容思想と宗教観について、当時の社会状況やロックの寛容思想が形成された背景を踏まえて考察した結果、結論として次のことが指摘することができる。

第一に、ロックの寛容論は国内状況、国外状況を具体的に反映する内容となっている。ロックの思想の根底には、神、神の被造物としての人間、所有権（プロパティ）の保全に対して尊厳を持つ傾向がある。こうした思想は、彼が厳格なピューリタンの家系で生まれ育ったことやロック自身が自分の生まれ育った時代を「嵐の時代」と呼んだように、社会状況などに起因していると推測することができる。ロックの思想に対して、当時の社会状況は、宗教を理由とした争い、国王が変わるごとに起きる動乱など、人間の社会的利益が脅かされる状況だった。ロックにとって、宗教的寛容論を主張することは、社会（国家）やそれらを構成する人々の社会的利益の安全性を確保するための役割を担ったものだったということが指摘できる。

第二に、「救済の個人化」や「救済の自己責任論」を繰り返して論じていることから、ロックは人間が神から与えられた能力を遺憾なく発揮するためにも、「信仰の自由」

や「政教分離」が必要だという主張であることが指摘できる。それは、宗教に関する事柄について、為政者や教会の介入があることが、神に対して忠実であろうとする者（真であろうとする者）の信仰を阻害する要因となっているというロックの考えに表れているということに指摘することができる。

そもそも、ロックの主張によると、神の被造物である人間は、神に対して、「魂の救済」という義務を負っていた。この義務は、神から与えられた能力や共有物を遺憾なく用いるためにある。ロックの考えでは、人間は来世に関する「不死なる魂」と現世に関する「現世的な生活」を持っている。「現世的な生活」を維持するために、神は人間に共有物や能力を与えた。それらから、労働や所有権が生まれ、人間の労働や勤勉は神と理知により、「神の御心に適う」（つまり、神の栄光を示す）ように生活を営んでいく必要があるとロックは論じた。こうした「現世的生」を保全させることが可能になった上で、「魂の救済」に対する、神への義務を果たすことになった。

つまり、ロックの「良心の自由」や「政教分離」の背景には人間が神に対して果たすべき義務があると指摘することができ。さらに、人間の義務を背景に、ロックの寛容論が、神と人間への信頼に寄せたものであったと指摘する

ことができる。人間の能力を以ってすれば、諸教会の平等化や併存が可能だとロックが提唱しているからである。

第三に、『書簡』から読み取れるロックの宗教観は親プロテスタント的で、反ローマ・カトリック的である。まず、親プロテスタント的要素が多く見られるという点については、ロックの宗教観には、「聖書のみ」や「使徒的伝承の否定」というプロテスタント的観点から、反ローマ・カトリックを批判する論が数多く見られる。特に、ロックは「聖書」に対して厳格であり、「聖書」に書かれていないことを主張するものに対しては、厳しい態度で臨んでいたということと『書簡』から読み取ることができる。ロックは、キリスト教に対する、絶対的な信頼を「神」や「聖書」に置いていた。

また、プロテスタントとローマ・カトリックの中道をいく英国国教会に対しては、国教会の教義や歴史的背景を踏まえると、ロックの主張する寛容論とは合致しない点があり、ロックが国教会体制に対して否定的であったと指摘することができる。

教会論に関してロックは「フリー・ヴォランタリ・ソサエティ」という教会論を展開している。この教会に対する考えは、M. ヴェーバーの定義により、「セクト的である」と指摘できる。

第四に、ロックの寛容思想と宗教観は、神と神の被造物である人間との関係性という文脈で論じられていると指摘することができる。ロックの寛容論には、人間の能力に対する至らなさを認めながらも、神の系譜の下にある人間に寄せる信頼がある。また、「信仰」と「理知」の両立を図る姿勢や、「真」に対する「不可知論」の解決の糸口を最終的には神に求めている。さらには、無神論者はロックの痛烈な批判の対象となっている。ロックは理神論者と論じられることがあるが、理神論とは、一線を画すべきだと考える。

本論文では、ジョン・ロックの『寛容についての書簡』(A Letter concerning Toleration)を一次資料として、ロックの寛容思想や宗教観がいかなるもので、『書簡』にどういった意図が込められていたのか当時の社会情勢やロックの寛容思想を考察することで、ロックの寛容思想や宗教観を明らかにした。

今回の研究を通して、ロックの宗教的寛容思想の代表作である『書簡』を、同時期に出版された『人間知性論』と『政府二論』と共に考察することにより、神と人間の関係や市民社会との関係の中から、結論を導き出すことができた。しかし、ロックは『書簡』を出版した後、キリスト教関係の著作をさらに出版している。ロックが『書簡』を出版し

た後に激しい批判・攻撃を加えたのが国教会右派で神学者
 ジョナス・スリップローストである。彼との論争のためにロック
 は、『第二書簡』（一六九〇年）、『第三書簡』（一六九二年）、
 『第四書簡』（一七〇四年に序文のみで絶筆）を書いている。
 また、ロックがさらなる聖書解釈に力を注ぎ込んだ著作、
 『キリスト教の合理性』（*The Reasonableness of Christianity*、
 一六九五年出版。）や『パウロ書簡註訳』（*A Paraphrase
 and Notes on the Epistles of St. Paul* 未完。）が存在する。こ
 うしたロックのキリスト教関連作品を踏まえられていない
 点に本論文の限界がある。そのため、『書簡』および、『人
 間知性論』、『政府二論』とロックの人生や、社会情勢から
 読み取ることのできる点に考察が限定されているといえ
 る。今後の課題として、ロックのキリスト教関連作品や草
 稿、メモ書きや切れ端などのロックの遺品「ラヴレース・
 コレクション」などの一次資料との比較検討を行なうこと
 により、ロックの寛容思想、宗教観、そしてキリスト教徒
 ロック像の姿に迫ることができると考える。さらには、ロッ
 クの他の思想家との関係性や後に与えた影響（信仰の個人
 化、理神論や啓蒙思想との関係）という文脈においてロッ
 クを研究するということが今後の課題に挙げておきたい。

《註》

- (1) 宗教改革時代にミカエル・セルヴェが、逮捕、裁判、処刑された事件のことである。彼は、伝統的な教義が指し示すような形での「三位一体」の教理が聖書のどこにも見出されないことから、三位一体の教義を否定した。
- (2) ロックはカステリオの著作を所有し読んでいた。下川潔『ジョン・ロックの自由主義政治哲学』、名古屋大学出版、二〇〇〇年。
- (3) 大澤麦「ジョン・ロック『寛容書簡』とその文脈」『聖学院大学総合研究所紀要』第十六号、一九九九年、四一〇頁。
- (4) スーザン・メンダス（訳：谷本光男ほか）『寛容と自由主義の限界』、ナカニシヤ出版、一九九七年。メンダスの見解は「イギリスやヨーロッパの宗教改革の時代における宗教的寛容という特定の実践的な問題に対する応答であるだけでなく、寛容、とりわけ宗教的多様性に対する寛容をより一般的に哲学的に正当化しようとする企て」（三三頁）。『書簡』を歴史的文脈の中で捉えることは認めつつも、哲学的著作として捉えるという方法論を取っている。
- (5) ロックの寛容論に関する方法論をめぐる論争はしば

しば起こる。こうした方法論に関しては、大澤麦「現代寛容論の一段面―J. ウォードロンならびにS. メンダスのロック解釈を手がかりに―」、「聖学院大学総合研究所紀要」第二一号、二〇〇一年、一九九一―二三〇頁を参照。

- (6) 加藤節『ジョン・ロックの思想世界神と人間との間』、東京大学出版会、一九八七年、六頁。

- (7) 大槻、前掲書、三四九頁。なお、ラテン語版とポプル版両方を元に邦語訳した、この書を参考とした。

- (8) 大澤麦「ジョン・ロックにおける寛容の概念」『政治思想研究』二号、二〇〇二年、三七頁。ラテン語版原典とポプル版をめぐる議論についての詳しい解説がある。

- (9) 『人間悟性論』と『統治二論』が出版されたのは共に一六九〇年と『書簡』が出版された一年後である。しかし、両本は『書簡』よりも以前から構想され、草稿が書かれていた。

- (10) 同、七七頁。

- (11) ただし、ロックは『書簡』同様、無神論を非難している。

- (12) 大槻、前掲書、七九頁。

- (13) 同、一三四頁。

- (14) 同。

- (15) 同、一七〇頁。同様の記述が4-10、6、4-12、2にもある。

- (16) 加藤節、前掲書、一〇九頁。井上公正著「理知と信仰」『奈良大学紀要』第一八号、一九九〇年、一一三頁。

- (17) 大槻、前掲書、一七〇頁。

- (18) 同、一八〇頁。

- (19) 同、一八四頁。

- (20) この書は王政復古期の王党派の理論武装の道具となっており、これを論破することが国王専制体制を根絶するために必要だった。

- (21) 田中浩・浜林正夫・平井俊彦・鎌井敏和共著、前掲書74頁。

- (22) 同。

- (23) 同、二〇九頁。

- (24) マックス・ヴェーバー著（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九年、三〇四頁。

- (25) ロックの友人かつ貨幣改鋳事業に共に関わったニュートン（Sir Isaac Newton：一六四二―一七二七年）もまた、ユニテリアンとしての信仰を密かに持っていた。

(26) 野沢協『ビエール・ベール著作集』、第二卷(『寛容論集』)、法政大学出版局、一九七九年、訳者「解説」、九二〇頁。

野沢はベールが対立する宗派の仲裁を図ろうとしたという解釈ではないということを論ずるため、「当事者の寛容論」という表現を用いている。ロックの寛容論が「当事者の寛容論」であることは本文中で指摘したとおりだが、ベールのそれとは異なることは、野沢の見解からもわかることである。また、ロックとベールの寛容論を比較した、久保信本「十七世紀後期ヨーロッパにおける宗教的寛容の問題・ジョン・ロックとピエール・ベール」、『宗教法』第二〇号、二〇〇一年、三五―五四頁が詳しい。ちなみに、この論文中で久保はロックを「プロテスタント」だと記述している。

(27) 生松敬三訳『寛容についての書簡』、大槻春彦編『ロックヒューム』、世界の名著32、中央公論社、一九六八年、三五〇頁。

(28) 同。

(29) 生松、前掲書、三三三頁。

(30) 同。

(31) 浜林正夫著『ロック』、研究社、一九九六年、十九頁。

(32) 田中浩・浜林正夫・平井俊彦・鎌井敏和共著『ロック』、清水書院、一九六八年、18頁。

(33) ロックが『政府二論』で、フィルマーの絶対君主制を攻撃したことは、本文中で述べた通りであるが、ブラウンによると、このフィルマーの父権制と君主制、政治権力と父権を同一視する立場がフロイトと同様ののだという。

ブラウンは、「ロックに言わせれば、『父権』と呼ばれる横暴で異様な妖怪」、それは「巨大な化物」ということになる。ロックは、このフィルマーの原始の父権を否定し、原始の自然状態において人間はすべて自由にして平等なのだと要請する。自由を守るということは、父の暴政に対抗して子供たち (children)、息子たちを守ってやることである。ロックはフィルマーの父権を殺害し、あの妖怪を打倒する。著述によるロックの闘争は、フロイトの言う原始の犯罪を再現している。」と記述している。「ロックはフィルマーの父権を殺害し、あの妖怪を打倒する」というブラウンの記述から、父権の打倒と国王の処刑が一致するということを読み取ることができる。(N. O. ブラウン著(宮武昭、佐々木俊三訳)『Loves Body』、みずす書房、一九九五年、三一―四頁。)

- (34) 大槻、前掲書、三五四頁。
- (35) 同、三五六頁。
- (36) 大槻、前掲書、三五六頁。
- (37) 同、三五六―三五七頁。
- (38) マックス・ヴェーバー著（大塚久雄訳）『プロテスタントイジムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九年、二六四頁。
- (39) 川北稔編『イギリス史』、山川出版社、一九九八年、二〇二―二〇三頁。
- (40) 大槻、前掲書、三五八頁。
- (41) 同。
- (42) 同、三五八―三五九頁。
- (43) 同、三五九頁。
- (44) 同、三六〇頁。
- (45) 同。
- (46) 同、三六〇頁。
- (47) 同、三六一頁。
- (48) 同。
- (49) 同、三六一―三六二頁。
- (50) 同、三六二頁。
- (51) 同、三六三―三六四頁。
- (52) 同、三六六頁。

(53) ロックが用いる「自然」や「生まれながら」という言葉は、「自然権」生まれながらの権利」と解釈すべきと考えられている。なぜならば、『統治二論』において、「人間は生まれながら、他のどのような人間とも平等に、つまり、世界中のたぐさんの人間と平等に、完全な自由や、自然の法が定めるすべての権利や恩恵を抑止されずに享受することができることが示されている (Man being born, as has been proved, with a title to perfect freedom and an uncontrolled enjoyment of all the rights and privileges of the law of Nature, equally with any other man, or number of men in the world, hath by nature a power) と論じているからである。本文中で用いた『書簡』の部分でも、ロックは国王（為政者）の権力の上位性について「生まれながら」と記し (Princes indeed are born superior unto other men in power) 平等性にひびくは「自然」(but in nature equal) と記している。しかし、この部分での使用法については、ロックは平等に自然権を持ち、平等な存在であるすべての人間が「自由」を持つという点で、平等性については「自然」という言葉を使い、権力の上位性についての「生まれながら」という言葉には「権力を持つという点では」と

断りを入れているように、自然権的なニュアンスは含まれないと考えられる。(英文引用、Hutchins,Robert Maynard,Great Books of the Western World vol. 35 Locke Berkeley Hume,Chicago,1952 p.9,44.傍線筆者。)

- (54) 同、三六九頁。
(55) 同。
(56) 同、三七一頁。
(57) 同、三七二頁。
(58) 同、三六八頁。
(59) 同、三七七頁。本文では、「もしある集会が幼児を犠牲にしようと考えたり、あるいは「原始キリスト教徒に誤ってそうした非難が浴びせられたように」不浄なる雑婚によってわが身をけがそうとしたり、あるいはその他のそうした憎むべく厭うべきこと」(傍点ロック)と書かれている。
- (60) 同、三七八頁。
(61) 同、三八一頁。
(62) 同、三八五頁。
(63) 同。
(64) 同、三八九頁。
(65) 同。
(66) 同、三九〇頁。

(67) 同。

(68) 同、三九〇―三九一頁。

(69) 友清理士『イギリス革命史上 オランダ戦争とオレンジ公ウイリアム』、研究社、二〇〇四年、八四―八六頁。密約全文については、John Lingard The History of England vol.Ⅹも含めて訳出した、友清理士による歴史文書邦訳プロジェクトの訳文を参考とした。

(70) 同。

(71) 同、三五九頁。

(72) 同。

(73) 残りの二つは、万人司祭と信仰義認である。

(74) 大概、前掲書、三五六頁。

(75) 三十九箇条は今日においても国教会の公式指針とされている。

(76) 塚田、前掲書、五〇八頁。

(77) ロックが聖書を重要視するプロテスタント的立場を取っていることは本文中で述べた。しかし、ロックが「聖書」の外典についてどのような考えを示していたかは、記述されていないため分からない。ただ、国教会が『三十九箇条』第六条では、聖書に重きを置くプロテスタント的立場を受け入れながらも、プロテスタ

ント各派が外典を聖書として受け入れなかったのに対して、国教会は、「信仰上の指針」として聖書に付け加えるという、ローマ・カトリックと同様の立場を示している。

(78) 塚田、前掲書、五一五頁。

(79) 同。

(80) 同、五二二頁。

(81) The original text of Henry VIII, s 1534 Act of Supremacy.

(82) 塚田、前掲書、98頁。

(83) 石村耕治「イギリスの宗教法文献紹介(一)」『宗教法』第二七号、二〇〇八年、二〇六―二〇七頁。

(84) まず、ロックが国教会支持の立場だと考えられる理由を論ずる下川潔が、「ロックの『政教分離』の主張は、国教会制度の否定を論理的に合意すると通常考えられているが、この見解は無条件に支持できない。なぜなら、国教会制度を温存したとしても、統治者が非国教徒や国教徒に対して、宗教上の事柄に関して刑罰を科すことがないのであれば、この意味での『政教分離』は実現するからである。さらに、国教会への加入を強制せずに自発的なものにし、統治者を国教会の単なる一メンバーとして位置づけるならば、この意味での『国教会』は、ロック自身の教会観とも矛盾するこ

となく成立する。」と論じている。

また、中間的な立場として大澤麦の論がある。大澤の論は、ロックの『書簡』を二つの文脈で捉えている。第一に、名誉革命以前という文脈で捉えたときは、「ロックの寛容論はアングリカン教会の存在根拠を原理的に否定する理念によって構築されている」と論ずる。第二に、名誉革命後のウィリアムによる統治の正当性を念頭においた場合、「国教会の統一を維持しつつ、できるかぎり非国教徒の信仰の自由を擁護する」という政治的立場を表明」したとする論である。(大澤麦「ジョン・ロック『寛容書簡』とその文脈』聖学院大学総合研究所紀要」第十六号、一九九九年、四一五頁、四一六頁。)

そして、国教会に否定的だったとするのが、加藤節である。加藤は、信仰の個人化を阻むという観点から、「個人の私的な宗教的判断の自立性を奪うような信仰の形式、すなわち、政治権力と国教会との抱合体制が権力的、他律的に強制する体制宗教を、まさに「真の」信仰の名において拒否せざるをえなかったことに他ならない」と論じている。(加藤節「ジョン・ロックの思想世界神と人間の問」東京大学出版、一九八七年、一三九―一四〇頁。)

(85) 大槻、前掲書、三九三頁。

(86) 同。

(87) 同、三九一頁。

(88) 同、三九九頁。

(89) 同。

(90) 同、四〇〇頁。

(91) 同。

(92) 同、四〇二頁。

(附記) 本稿は、愛知教育大学大学院二〇一四年度修士論文
を改稿したものである。